

目次

巻頭言・先達の知“かたち”に学ぶ日本の感性とまちづくり	1
■特集「熊本の震災復興と地域力」	
九州ブロック担当企画・編集	
熊本の震災復興と地域力（見学会報告）	2, 3, 4
一熊本市民の視点から	5
行政（企業支援）の視点から	6
壊れてしまった地元は、強くなっていた	7
地域デザインの視点から感じたこと	8
連載・EDeye もうひとつの団地再生	9, 10, 11
関東ブロック報告・「藝大Hedge-2」～2017年秋の植樹ワークショップ	
	12
事務局報告	12

発行日＝平成30年3月10日

発行人＝

杉下哲 sugisita@dsn.t.kougei.ac.jp

編集＝

上綱久美子 tandk@sepia.ocn.ne.jp

小泉雅子 koizumim@tamabi.ac.jp

佐々木美貴 mikisan@blue.ocn.ne.jp

山内貴博 yamauchi@akibi.ac.jp

九州ブロック編集＝

森田昌嗣 morita@design.kyushu-u.ac.jp

曾我部春香 sogabe@design.kyushu-u.ac.jp

◆日本デザイン学会環境デザイン部会事務局
〒164-8678 東京都中野区本町2-9-5
東京工芸大学 芸術学部デザイン学科 杉下哲気付
TEL 03-6276-1549 FAX 03-6276-1549
Mail 平松早苗 hiramatsu@mbn.nifty.com

巻頭言

先達の知“かたち”に学ぶ 日本の感性とまちづくり

森田昌嗣（九州大学）

私は、熊本地震で倒壊しなかった加藤清正が築城した熊本城「宇土櫓」を支える「武者返し」といわれる石垣の美しい「かたち」に秘められた感性と技術の融合の知に驚きを覚えた。また、熊本城はこの400年間何度も危機にあいながらも人々の「共助」の努力で乗り越えてきた。この学びからは、近年の近代合理的知の「理性」を基に、利便性や効率性を優先する科学技術偏重の「もの」中心の物的満足の限界を物語っている。そして現在「もの」から「こと」そして「こころ」にかかわる「ひと」の質的満足に価値観は転換しつつある。「ひと」の理解を深め「ひと」の質に関する価値の形成と満足のためには、「ひと」の「感性」からの知に着目する必要がある。

「感性」は、非言語的、無意識的、直感的に「ひと」に作用する外界からの刺激に応じて感受する能力であり、対象を理解する能力（悟性）の素材となり理解される。その時代における人々の「理性」の構造化が文明であり、その文明を人々の「感性」によって投影して映し出されたのが文化といえる。

極東に位置するわが国は、西側の文明と文化の終着地となり伝播することはできず醸成させることに価値を見だし、醸成の悟性を繰り返すことによって、特有な解釈となる内面的「感性」を育むことになったとされる。特に江戸期は、室町期から培ってきた他に類のない個性豊かな思想、芸術、文化を醸成させ開花させた。「感性」と「理性」の調和が生み出した「ひと」の「こころ」を美しい作法、もの、そして場の連携した「しくみ」にかたちづけている。

生活と社会の基盤となるまちづくりにおいては、複雑化多様化するまちの課題解決のために、これまでの行政主導型、上意下達型の階層的な人的まちづくり組

織からの転換が試みられている。NPOやボランティア団体など公益活動団体と住民、そして行政が互いの持ち味を活かして、地域に根ざした非階層でフラットな共助社会の実現に向けた取り組みなどがある。このまちづくりには、隣組などの地縁による自治コミュニティにより街を運営してきたわが国の学ぶべき先達の知の“かたち”がある。わが国の歴史には、社会の課題を生活者個々の課題として受け止める「感性」、そして互いに協働して解決に向かう「感性」の連鎖（コミュニケーション）の知がある。

次代を拓くために「感性」は重要なキーワードとなる。生活や社会の「こころ」を「ひと」として読み取り「こころ」を「美しい“かたち”」に可視化することが肝要である。そのためには、わが国の先達が残した「感性」と「理性」の調和、「感性」の連鎖（コミュニケーション）による共助、「感性」を物語る価値創出など、わが国の先達の知の“かたち”からの学びこそが、美しく豊かなまちづくり創生に結びつくのではないだろうか。